

# 待兼山俳句会

第六百八十三回

世話人

山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来眞知子  
東中 乱・向井邦夫・森 莱衣

令和六年一月十五日（月）

会場

大阪俱樂部

会議室

締切

午後二時半

## 出席者

瀬戸幹三・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 乱・東野太美子  
向井邦夫・森 莱衣・山田安廣

## 投句者

山戸暁子・植田真理・碓井遊子・草壁 昂・西條かな子・鶴岡言成・中嶋朱美・中村和江  
西川盛雄・根来眞知子・平井瑛三

出席者十一名＋投句者十一名 計二十二名

## 兼題

松納・寒椿（幹三） 大寒・春著（暁子）

当季雑詠 通じて八句

## 次回

例会 令和六年二月十九日（第三月曜日） 会場 大阪俱樂部 会議室 締切 午後二時  
兼題 寒明・野焼く（幹三） 草萌・冴返る（暁子） その他当季雑詠

## 選者吟

大寒の雨に黒ずむ松林

幹三

松とれて路地に魚を焼く匂ひ

手に受けて紅き重さや寒椿

待たせしは春著のせいと謝らる

暁子

芸をする春著の猿のよろめける

大寒の石を叩けばきんと鳴る

## 幹三 選

初空のただ真青なるめでたさよ

丸き跡二つ残して松納

大寒や生き物なべて丸く耐へ

夜咄や手燭に浮かぶ白茶碗

法堂の冷えを抜け出て寒椿

◎寒椿彼方を走る漁船団

転ぶなく喉詰めるなく松納

松明けて路地の少しく広くなり

山行や大寒山を包みけり

大寒の包丁光る厨かな

花びら餅乙女は二ついただきぬ

◎千代紙に席順記す新年会

大寒やぐにやり重なる猫二匹

旅の終はり遠き岬の寒椿

大寒の石を叩けばきんと鳴る

◎松下ろす夫の仕草も老いにけり

◎けふ人と会ひたくないの寒椿

晴れやかに顔揃ひたる新年会

大寒や一人の門をはや鎖ざす

太美子

兵十郎

眞知子

安廣

眞知子

真理

翠

安廣

昂

瑛三

輝子

乱

真理

眞知子

暁子

かな子

太美子

遊子

暁子

松取れて門も気持もありふれて

来るはずの人皆来たり松納

にぎわいがプラツトホームに春著かな

大寒や千年杉を昇る水

モノクロの大寒鼻に突き刺さる

◎松納うつし世の音聞こえけり

祝ひ菓子懷紙に並べ初句会

水仙がなだれとなつて淡路島

◎さきがけの一輪紅し寒椿

深深と更くる中庭寒椿

◎春著広げまづ畳み方教へおく

朱の春著目元の紅の匂ひたつ

乱

輝子

茉衣

眞知子

邦夫

真理

兵十郎

茉衣

瑛三

邦夫

輝子

輝子

## 幹三 特選句講評

・寒椿彼方を走る漁船団

真理

近景に椿の赤、遠景に波を立てて進む船の群。視点の動くスピードが心地いい。上五の打ち出し方・切れ方が実に寒椿らしいです。

・千代紙に席順記す新年会

乱

小さく折られた千代紙を開いて、ここだ、あそこだと  
言っている出席者が目に浮かびます。千代紙が正月らし  
い楽しさを出しています。

・松下ろす夫の仕草も老いにけり

かな子

日常のゆるやかな変化には気づきにくいですが、年に  
一度のことだと違いが分るということでしょう。正月と  
いう一年の節目、夫婦ならではの思いがあります。

・けふ人と会ひたくなの寒椿

太美子

枯れた庭の中にぱつと咲く椿。こういう気分、ものの  
言い方がとてもよく似合うと思いました。季語を信じた  
上での思い切った取り合わせです。

・松納うつし世の音聞こえけり

真理

「うつし世」などとまだ浮世ばなれした言葉を使つて  
いるところが正月気分の抜けていないところです。類想  
句があるのは確かですが言葉の選択がユニーク。

・さきがけの一輪紅し寒椿

瑛三

寒中の枯れの中、意表をつく赤さが目に飛び込んでき  
た、ということでしょう。何度も読んでみたくなる形の  
いい句です。

・春著広げまづ畳み方教へおく

輝子

着る前からもう「春著」は始まっています。親から子  
へ。大切に扱われている時間の長さも描かれています。

暁子 選 (後選)

大寒の土を起せば幼虫も

和江

◎大寒や生き物なべて丸く耐へ

眞知子

あの頃は春著で迎えた嬉しくて

朱美

◎寒椿彼方を走る漁船団

真理

コロナ経し熱き合唱寒椿

翠

山行や大寒山を包みけり

昂

大寒の包丁光る厨かな

瑛三

千代紙に席順記す新年会

乱

大寒やぐにやり重なる猫二匹

真理

氣に入りの母の春著をまた借りて

松納行き交ふ老いの送迎車

大寒の風に曝せば菜旨く

小袋にたすき忍ばせ来し春著

寒椿開いては落ちまた落ちる

大寒や声はるかより托鉢僧

◎待合にドリル片手の春著かな

松納いつもの場所に猫戻る

松納楼門阿蘇の復興へ

被災地の毛布いのちの綱となり

◎大寒や猿の揺さぶる鉄の檻

◎モノクロの大寒鼻に突き刺さる

松納うつし世の音聞こえけり

大寒の空気は棘のあるやうな

小豆粥ついでの汁粉愛づるなり

◎肩上げを下ろす夜なべの春著かな

◎元日の泰平破る午後の地震

春著の子千の階段登り来し

春著広げまづ畳み方教へおく

## 暁子 特選句講評

暁子

翠

堯子

兵十郎

言成

眞知子

恵子

茉衣

盛雄

遊子

幹三

邦夫

真理

安廣

乱

かな子

太美子

兵十郎

輝子

・大寒や生き物なべて丸く耐へ

眞知子

そう言われればそうですね。虫も動物も人も背を丸くして。

・寒椿彼方を走る漁船団

真理

椿はよく海を見下ろす崖の上などに群生している。沖を行く漁船団を見送っているかのようだ。初漁かもしれない。

・待合にドリル片手の春著かな

恵子

もしかしたら間違った解釈かもしれない。病院かどこかの待合室に春著の子が待っている。宿題か、受験子か、そんなところでもドリルをしている。今時の子ども描写かと理解したが。

・大寒や猿の揺さぶる鉄の檻

幹三

猿は檻の中でいくつかの群れを作ってたまって、温めあっている。そのいずれの仲間にも入れてもらえなかった猿かもしれない。揺さぶられた鉄の檻が冷たい音を立てる。

・モノクロの大寒鼻に突き刺さる

邦夫

大寒を色彩で表すならばまさにモノクロだろう。大寒が鼻に突き刺さるとは！大寒の寒さの極限状態を表現された。

・肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子

「夜なべ」は九月の季節。しかしこの句から、歳末の昼間は忙しく、夜、成長した娘のために肩上げを下ろす母親の姿が目につかぶ。同じ季節の季重なりは焦点が二つに分かれるので避けたいが、あえて季重なりにして相乗効果を出す場合もある。この句のように他の季節の季節を普通名詞として使う場合はどうだろうか。夜なべは一年中するが、秋の夜長にふさわしいので秋の季節に入っているが、この句の「夜なべ」から秋を想像する人はいるだろうか。出来れば避ける方がよいが、季重なりの許容範囲は各人に委ねられるのではなからうか。皆さんのご意見をお聞きたい。

・元日の泰平破る午後地震

太美子

今年のお正月の記録。世界の戦争、日本の地震や空港事故で明けた今年はどんな年になるのでしょうか。

## 互選三句

朱美 選

大寒の空を旅する白い雲  
春著着せ孫の幸せ祈る宮  
春著着た家族写真や幾星霜  
どこの家にも幾枚かあるはず。共感できる句だ。

瑛三 選

松とれて路地に魚を焼く匂ひ  
大寒の大气引き裂く直滑降  
祝ひ菓子懷紙に並べ初句会  
初句会らしい明るく楽しい華やかさを活写。

和江 選

けふ人と会ひたくないの寒椿  
雀鳴く声に囲まれ松納  
大寒や生き物なべて丸く耐へ  
天も地も人も寒さに耐える一つの丸い世界感。

かな子 選

松納避難所の灯のまだともる  
待たせしは春著のせいと謝らる  
けふ人と会ひたくないの寒椿  
私の中では椿は乙女心、吉屋信子の七本椿を思い出す。

邦夫 選

大寒の大気引き裂く直滑降

昂

姉に紅少しねたまし朱の春著

和江

大寒の空気は棘のあるやうな

安廣

大寒の空気には色はなく皮膚や鼻を突き刺す棘がある。

恵子 選

春著着た家族写真や幾星霜

堯子

松納心定めて一步踏む

安廣

転ぶなく喉詰めるなく松納

翠

妣が餅を喉に詰め一大事。以後小さく切ることに。

言成 選

大寒の風に曝せば菜旨く

堯子

肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子

手に受けて紅き重さや寒椿

幹三

寒椿はよく落ちるが、手に受けると、成る程重さがある。

堯子 選

人生双六戻る振出なかりけり

翠

肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子

長生きは幸か不幸か寒椿

かな子

老いを潔く花を落とす寒椿という季語で表現された。

太美子 選

転ぶなく喉詰めるなく松納

翠

人生双六戻る振出なかりけり

翠

手に受けて紅き重さや寒椿

幹三

花の鮮やかさと軽さ、その場の人の会話と想像が膨らむ。

輝子 選

寒椿咲く坂一つ一つに名

幹三

松納これよりルーチンだけの日々

かな子

肩上げを下ろす夜なべの春著かな

かな子

春著の丈を詰めたりのばしたりした日々が懐かしい。

兵十郎 選

手に受けて紅き重さや寒椿

幹三

朱の春著目元の紅の匂ひたつ

輝子

松とれて路地に魚を焼く匂ひ

幹三

松の内は遠慮していた魚焼のできる嬉しさ。

昂 選

モノクロの大寒鼻に突き刺さる

邦夫

帯見せにくるりと回る春著かな

幹三

八十路なるスマホデビューや寒椿

翠

寒椿はご褒美か。

茉衣 選

尼寺の庭に色添へ寒椿

兵十郎

大寒の青ひろびろと有明海

盛雄

寒椿落ち波乱の年は明けにけり

言成

波乱の年明けが椿の落ちたのに巧みに重なっている。

眞知子 選

松納行き交ふ老いの送迎車

翠

寒椿落ち波乱の年は明けにけり

言成

大寒の包丁光る厨かな

瑛三

凍てつく厨で包丁もその光も冷えきっている大寒の景。

真理 選

けふ人と会ひたくないの寒椿

太美子

寒椿人の話の洩るる窓

幹三

大寒や猿の揺さぶる鉄の檻

幹三

寒さの中の獣と無機質な音が生々しい。

翠 選

芸をする春著の猿のよろめける

暁子

春著召す気力まだまだ旺盛な

太美子

朝春著夕は瓦礫に娘を探す

恵子

惨い現実です。

盛雄 選

大寒の空を旅する白い雲

言成

大寒や能登半島の地震悼む

かな子

冬椿墓地に明るき大阪湾

和江

墓地の冬椿の赤が大阪湾の大きさを明るくしている。

安廣 選

筆を取り思いや巡る寒椿

昂

山行や大寒山を包みけり

昂

待合にドリル片手の春著かな

恵子

成人式の待ち合わせにも受験を忘れぬ現代の若者の姿。

遊子 選

松下ろす夫の仕草も老いにけり

かな子

人生双六戻る振出なかりけり

翠

寒椿竹の竹打つ音澄めり

昂

竹林に添う寒椿。触れ合う竹の澄む音の静寂さと。

乱 選

似た顔にふと振返る春著かな

安廣

寒月や荒涼映す谷の水

茉衣

大寒の雨に黒ずむ松林

幹三

荒涼たる大寒の雨を「黒ずむ松林」で見事に表現した。

参加者自選句

ふるさとの庭で我待つ寒椿	朱美
大寒の包丁光る厨かな	瑛三
冬椿墓地に明るき大阪湾	和江
長生きは幸か不幸か寒椿	かな子
モノクロの大寒鼻に突き刺さる	邦夫
大寒や命救われ白湯一碗	恵子
大寒の空を旅する白い雲	言成
金ボタン春著を語る夫かな	堯子
寒晴や朝日に映ゆる鬼瓦	太美子
朱の春著目元の紅の匂ひたつ	輝子
松納その青竹で竹とんぼ	兵十郎
大寒の 대기引き裂く直滑降	昂
にぎわいがプラツトホームに春著かな	茉衣
大寒や声はるかより托鉢僧	眞知子
大寒やぐにやり重なる猫二匹	真理
八十路なるスマホデビューや寒椿	翠
湧水を囲むいのちの寒椿	盛雄
松明けて路地の少しく広くなり	安廣
松過ぎて空気俄かに動き出す	遊子
松取れて門も気持もありふれて	乱

ひとこと

山田安廣

句会当日十二時より大阪倶楽部二階食堂にて新年会を開催しました。俳句とは少し離れた世界で和氣藹々の中、談論風発して楽しい時間となりました。

今回の句会では震災に関する句が多く出句されましたが、幹三さんから「やはり俳句は体験に基づく事が原則なので、見ていないものを如何にも見て来たように描くのは如何なものか」とのお話がありました。時々俳句を「作ってしまう」私としては大いに反省させられたところです。

待兼山俳句会会費納入のお願い 寺岡 翠

令和六年度の年会費一万二千円をお納めください。  
期限は二月末日まで。振込先は左記の通りです。

・ ゆうちよ銀行の振込先

記号 14170 番号 20486361 名前 テラオカミドリ

・ 他金融機関からの振込先

店名 四一八（読みヨシイチハチ）、店番 418

預金種目 普通預金 口座番号 2048636